

## 試験池におけるチャネルキャットフィッシュの産卵期の生態と仔稚魚の行動

臼杵崇広

### 1. 目的

近年、瀬田川でチャネルキャットフィッシュが急増し、琵琶湖でも増加の兆候がみられる。今後、分布域の拡大が危惧されることから早急な対策が必要である。そこで、効率的な駆除技術を開発するため、本種の産卵期の生態や仔稚魚の行動に関する知見を収集した。

### 2. 方法

本種の産卵床とするため、試験池（幅 2.3 × 奥行 6m）の長辺の壁面を一边とし、その反対側を開けて侵入路としたコンクリートブロック（幅 39 × 奥行 10 × 高さ 19cm）2 段積み 6 セットで囲いを作った。この湖水を掛け流した試験池に本種の雌（体長 65.3cm、体重 5.84kg）と雄（体長 64.8cm、体重 5.29kg）を平成 29 年 6 月 14 日に收容し、その後の行動を追跡した。

### 3. 結果

收容後 4 日目までは雄が雌を追い回す行動が観察されたが、5 日目には雌雄ともに囲いの中に入って寄り添い、時々雄が反転するなどの行動が見られた。その後、雄が雌の腹部に頭部を押し付けたり、雄が雌の反対側を向いて寄り添い、尾鰭で雌の頭部を包み込み、尾部を震わせる行動が観察された。産卵数日前からは、雌が雄に寄り添い反転する行動が観察された。

産卵は同年 6 月 26 日の夜から翌 27 日の朝の間に行われたが、その行動を観察することはできなかった。卵塊は、長径 32cm、短径 30cm、高さ 10cm のお椀をひっくり返したような形状であった（写真 1）。産卵直後は雄が卵を保護しており雌も囲い内にいたが、観察のため池の覆いを外した際に雌雄ともに囲いから逃げ出した。覆いを戻すとすぐに囲い内に帰っ

た雄が卵を保護し、その後は雌の囲い内への侵入を許さなかった。

卵は同年 7 月 5 日にふ化し、その後 1 週間程度の間雄は仔魚を保護し（写真 2）、産卵床内への侵入者を激しく攻撃した。ふ化後 1 週間経つと、稚魚はブロック内に潜んだり（写真 3）、試験池の側面へと分散し、その後、試験池の底層を群泳するようになった。

ふ化後 30 日経つと、稚魚は背鰭と胸鰭の棘が発達して網に絡むようになり（写真 4）、琵琶湖で繁殖した場合には、漁業者の負傷や漁具の損傷など漁業への影響が懸念された。

今後は、これまでに天然水域や試験池で得られた生態的な知見や捕獲データなどを基に効率的駆除技術を検討していく必要がある。



写真 1 卵塊

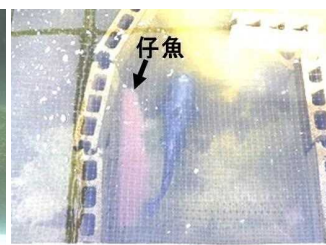


写真 2 仔魚を保護する親魚

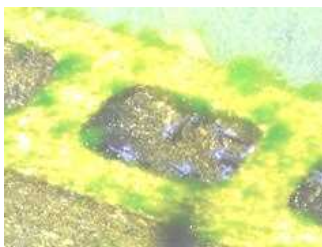


写真 3 ブロック内に潜む稚魚



写真 4 網に絡んだ稚魚